

シリーズ

発達に違いのある子どもたち 発達に違いがある子どもの コミュニケーションを理解する (中編)

まいすてつぷの子どもの達の学習場面には、さまざまな姿勢で取り組む姿が見られます。一見寝そべる状態でも書くことに集中している子、回転椅子でぐるぐる回っているけど、質問にはよく答える子、バルーンに座って揺れながらパソコン課題に取り組む子…。子ども達の姿勢がさまざまなのは、それぞれの脳の情報処理の仕方に特性があり、ひとりひとり一番集中しやすい状態が違うからです。

感覚情報の交通整理が 苦手なお子さんC君

まいすてつぷに通う小学3年生のC君は、理解力がとても良好なお子さんで、支援クラスに所属しながらも通常のクラスで学習する機会が多いお子さんです。C君は、小さい頃から周囲の状況に合わせて体をコントロールすることが苦手で、座っていても椅子からずり落ちたり、遊具のトンネルをくぐろうとしても、ぶつからずにはくぐれなかったり、ものを目で追う時に眼球のみを動かせず、顔ごと動かしていたり、通常の発達を遂げている人なら無

意識に行えることを、意識してがんばっても同じような動作をすることが難しい、そのような発達の特性を持っていました。なので、授業中先生の話を集中して聞くことや、黒板に書かれた文字を書き写すこと、周囲の子どもの達のように注目を向けられることなど、一つ一つは何とかできても、いくつかを同時進行することは至難の技でした。

さまざまな子どもの 姿から学ぶこと

私たちの脳は通常、外界からのさまざまな感覚情報を受け取り、すべてを同じように情報処理するのでは

なく、今自分にとって必要な情報なのか、それとも不必要な情報なのかを判断し、感覚情報を取捨選択することで、周囲の状況に合わせた「適応行動」を取ることが出来ます。このような「感覚情報の交通整理」がなされることで、「注意の集中・持続」が保障され、そのことが「情緒の安定」にもつながります。

発達に違いのある子ども達の多くは、この「感覚情報の交通整理」が苦手で、人の多い教室などでは必要ではない情報まで入りこんでしまい、何に注意を向けるべきか混乱してしまいます。

「正しい姿勢」であり続けることも、地球の重力に抗し姿勢を維持するために必要な「触覚」「固有感覚」「平衡感覚」などの感覚情報の交通整理が必要になりますので、苦手な彼らの立場から見れば、なぜこんなに人の動きや音が多い場所で、みんな平気で、姿勢も崩さず、授業に集中しているのか理解に苦しむ…というところでしょう。

周囲の大人に わかってほしいこと

コミュニケーションには、言語的なものと非言語的なものがあります。が、仕草や姿勢、視線などは非言語的(ノンバーバル)コミュニケーションにあたります。

常識でいえば「姿勢の崩れ」は「気持ちのたるみ」と解釈されがちです



感覚情報の交通整理

<文書寄贈>

NPO法人こころ・コミュニケーションの発達支援「まいすてつぷ」

<参考文献>

木村順著 / 育てにくい子にはわけがある / 大月書店

が、これまで述べたように、「感覚情報の交通整理」が苦手な子どもを、「常識」というものさしで測ってしまうと、気持ちを誤ってしまいます。子どもの「心」にはモチベーションがちゃんとあるのに、「体」がついていなくて姿勢が崩れる、よって「やる気がない」と判断されてしまう…それはとても悲しいことです。

発達に違いがあっても、適切な教育を受ける権利があります。子どもの気持ちを正しく読み取れる大人が一人でも増えていくことを願います。